

ルソー 『学問芸術論』 をめぐって (その二)

井上堯裕

Some Problems about the Success of Rousseau's *Discourse on Sciences and Arts* (2) —

In this series of articles, the author intends to examine the circumstance of the success of Rousseau's First Discourse. In the wake of the preceding article which treated the Academy of Dijon and the competition of 1750, this article is concerned with the "Mercure de France".

The "Mercure de France" was a rather popular literary magazine for the readers of polite society. Its newly nominated director was by chance G. Th. Raynard, one of the companions of Rousseau and Diderot. Perhaps in accordance with Diderot, to whom Rousseau commissioned the publication of his *Discourse*, Raynard led a vigorous campaign in his magazine for this *Discourse* and no doubt this campaign would have contributed largely to its success. But Raynard was not in total accord with Rousseau's thoroughly negative opinion on civilization. He made reservations on several points of Rousseau's argument and this stand would have been common already among most of Rousseau's companions including Diderot himself.

周知のように、ルソーが『學問芸術論』を書くきっかけとなったのは、ヴァンセンヌの城に拘禁されていたデイドロを見舞う途上、『メルキュール・ド・フランス』誌上で報ぜられていた、デイジヨンのアカデミーの懸賞論文の課題を目にしたからであった。この『メルキュール・ド・フランス』誌は、その後も、ルソーの論文が入賞すると、それをいち早く詳細に紹介し、その後によく論争の火付け役をしている。こうして、『學問芸術論』の成功とルソーの思想家としての出発には、『メルキュール・ド・フランス』が決定的に重要な役割を果たしたわけだが、それではこの『メルキュール・ド・フランス』とはどのような雑誌であったのか、また、それは、この一地方アカデミーの懸賞に應じたまったく無名の著述家の論文を、なぜこれほどに取り上げたのだろうか、本編では、そういった問題を検討しようと思う。

『メルキュール・ド・フランス』(Mercure de France)は、一六七二年、ドノー・ド・ヴィゼにより創刊され、近代ジャーナリズムの先駆とされる『メルキュール・ガラン』(Mercure Galant)を祖とした文芸情報誌であった。⁽¹⁾『メルキュール・ガラン』は、その名が示すとおり(Mercure ≡ マーキュリー、神々のあいだの伝令使、galant ≡ 典雅な、色好みを)、社交界の若い男女を讀者とした雑誌であった。この雑誌は、一七二四年の改組以後、『メルキュール・ド・フランス』と名前を変え、社交界の雑誌としての性格を維持しながらも、より一般の讀者をも対象とする文芸誌として生まれ変わるようになった。そして、政治ニュースを主に扱う『ガゼット・ド・フランス』(Gazette de France)、学術情報を紹介する『ジュルナル・デ・サヴァン』(Journal des Savants)とともに、国王の特許状により独占権を与えられ、その編

集発行人 (editor) は、政府により任命された。この編集発行人の地位には、かなりの年俸が伴っていたが(一七五〇年から五四四年にかけて、編集発行人であったレナルは、千二百リーヴルの年俸を受け取っていた)、雑誌自体も相当な収益をあげ(一七五四年には約三万二千リーヴル、一七六〇年には六万リーヴル)、その一部は、この頃から作家たちへの年金の供与に当てられるようになった。版型は十二折、縦百七十五ミリ、横百五ミリと文庫版、新書版よりやや大きく、ページ数は二百ページほど、月刊で、月により二冊からなることもあった。当時の紙の質を考えれば、やや分厚いものの、いかにも持ち運びには手ごろそうで、ルソーがヴァンセンヌへの道中、歩きながら読んだというのも、なるほどと思われる。

一般に、当時の雑誌のたぐいは、新刊書の紹介を主な役割としていたが、『メルキュール・ド・フランス』の場合もそうであって、そこで紹介されている書物は、狭い意味での文芸書から哲学書や理工学書に及び、また書物だけに限らず、新作の芝居、あるいは版画や建造物、さらにはシャンソンが楽譜付きで紹介されている。しかし、一七五〇年当時には、こうした書評や芸術作品の紹介は、数十ページに限られ、大部分のページは、短い論文、演説、詩、戯曲の抜粋、短篇小説、さらには笑話、名言や逸話、言葉遊び、クイズなどの娯楽記事、文芸界、演劇界、音楽界、学界的の雑報、高級軍職・官職への任命や上流社会の消息、そして読者からの手紙に当てられている。そうした記事のうち、編集発行人自身の筆になるのは書評のみで、他の記事は他人の著作からの引用や読者からの投稿である。こうした雑然とした記事内容や、とくに教養的な真面目な記事と娯楽記事とが併載される構成は、一七二四年の改組以来の編集の基本方針であった。

ちょうど『学問芸術論』が刊行された時期にあたり、レナルが編集発行人であった一七五〇年から一七五四年の期間の『メルキュール・ド・フランス』の全記事を、統計的に分析した研究結果を参照すると、書評も含め、記事全

体の約四十四%を文芸分野が占めているのは、文芸誌であることからして当然であり、伝統的に愛好されたジャンルである詩や韻文劇がもつとも大きく扱われ、それについて、娯楽的な記事に多くの紙面がさかれていることは、この雑誌の性格をよく物語っている。また、文芸以外の分野について見ると、神学や法学に関する記事は少なく(神学書は新刊が案内されているが、書評の対象にはほとんどされていない)、それにたいして、歴史の分野は尊重され、かなり多くの書評が書かれている(書評全点数の十四%)。とくに古代史よりも近代史に重点がおかれ、また伝記も多く取り上げられている。哲学の分野では、人間本性を論じたり、あるいは人間関係をめぐる処世術を説いたりする道徳分野の書評や論説が大多数を占め、形而上学や論理学は敬遠されている。さらに理工学の分野でも、数学や物理学が相当な扱いを受けている一方、医学や工芸技術(たとえば時計やポンプなどの機械のメカニズム)など、具体的な関心を引く、実用的な分野の記事が多くを占めている。ここに見えてくるのは、十七世紀以来の伝統的な文芸上の好み(詩・韻文劇)を維持し、流行の数学や物理学に知的興味を示しながら、抽象的・原理的な学問よりも、具体的で実的な知識を好み、まだ経済学や博物学のような新興の学問には、あまり関心を示さず、ほどほどに知的な関心や虚栄心を満たしながら、何よりもひとりでの気晴らしやあるいは社交の話題となるような記事を求める、この雑誌の平均的な読者のあり方である。

なお、こうした記事内容のうち、とくに本稿とのかかわりで見ると、毎号、相当なページをさいて、いくつもの地方アカデミーの活動が紹介されているのは、おおいに注目されるところである。さしあたって一七五〇年から五年までの三年間分について見ると、『メルキュール・ド・フランス』は、当時存在していた約二十五のアカデミーのうち、十五のアカデミーに関する記事を掲載している。その多くは総会の議事録であったり、コンクールの課題の公示であったりするのであるが、記事の掲載頻度は、アカデミーによつてかなり異なっている。デイジョンのアカデ

ミーに関する記事は、この三年間に四度掲載されており、ボルドー（五度）に次ぎ、トゥールーズ、ポー、ラ・ロシエール、アミアンと並んで、その活動がよく報ぜられているアカデミーのひとつである。しかし、このことは『メルキュール・ド・フランス』が、とりわけディジョンのアカデミーに関心を寄せていたことを意味するものでは、必ずしもないであろう。こういった地方アカデミーのニュースは、当然のことながら『メルキュール・ド・フランス』の側からの個別の取材によるものではなく、各アカデミーが寄せるものをそのまま掲載しているに過ぎないと思われるからである。むしろ、そこに現われているのは、各アカデミーのいわば宣伝意欲とその背後にある会の特性や活性度であろう。

ところで、一七二三年の出版法 (Code de la librairie) と一七二四年の『ジュルナル・デ・サヴァン』と『メルキュール・ド・フランス』の改組をもって、〈新聞・雑誌の世紀〉の始まりとされるのであるが、この新聞・雑誌やその編集・発行にたずさわるジャーナリストたちは、一般に、決して良い評判を得ていず、モンテスキューから、ヴォルテールを経て、デイドロヤルソーにいたるまで、大思想家たちの一致した批判・攻撃の的となっていた。⁽⁴⁾ 新聞・雑誌とは、他人の著作を抜粋、要約し、それを知ったかぶりをしたがる無知で怠惰な読者に与えるものである。ジャーナリストたちは、金を稼ぐために文筆を汚す（労働者）であり、他人の著作を盗み、その無学無知あるいは悪意から、原著者の意図を歪め、才能に嫉妬してすぐれた著作をけなし、金をもらえばどんな凡作をも称賛する。新聞・雑誌は、「社会の災厄のひとつ、許しがたい盗賊行為」⁽⁵⁾（ヴォルテール）であった。先に見たところからもわかるように、『ジュルナル・デ・サヴァン』や『ジュルナル・ド・トレヴ』のような高級誌に比べれば、通俗誌に属する『メルキュール・ド・フランス』への評価は、当然、高くはなかった。実際、十八世紀半ばになると、編集者の側にも、読者の一部にも、この雑誌の引き継いでいた通俗性を改めようと、たとえば掲載される投稿作品の質の低さを問題にするよう

な動きが見られるようになった。

しかしながら、こうした批判にもかかわらず、この時期、『メルキユール・ド・フランス』は、先に見た収益のいちじるしい増加によっても明らかのように、順調に発展しており、とくに地方へ購読者を拡大しつつあった。⁽⁶⁾『メルキユール・ド・フランス』の予約購読者は、一七四八年には二十六都市に存在していたが、一七五六年には四十六都市(他外国の四都市)、一七六四年には五十五都市(外国に九都市)と広がっている。一七五八年から一七六二年にかけて編集発行人であったマルモンテルの時代、七百五十六人の予約購読者がいたが、そのうち、パリ在住の者は四百七十人で、二百八十六人が地方人であった。しかし、この予約購読のほかに、五百九十部が地方の書店を通じて販売され、さらに百十五人の行商人に販売が委託されていたというから、全体としては、全発行数約二千部のうち、およそ半数が地方読者の手に渡っていたものと思われる。なお、当時の読書の習慣からして、書物や雑誌は、近い人々のあいだで廻し読みをされたり、あるいは公共図書館、小私設図書館ないし読書クラブともいえる〈読書室〉(cabinet de lecture)、カフェなどの公共の場で多数の人々によって読まれたから、発行数にたいし、実際の読者の数ははるかに多い。また、七百五十六人の予約購読者について見ると、貴族、あるいは貴族とおぼしい者が約二百五十人、聖職者四十九人、司法官五十五人、商工業者四十四人、自由業三十六人、士官百八十九人、職業・地位の不明の者九十一人、女性百七人となっている。⁽⁷⁾つまり、『メルキユール・ド・フランス』の読者層は、ブルジョアジーを含む雑多な社会層にわたり、おそらくその平均的な教養水準はあまり高くはない有閑人たちであったと思われる。

こうして見ると、『メルキユール・ド・フランス』の記事の内容や水準は、まさにヴォルテールらの批判を浴びたその雑然さや通俗性によって、その読者層の要求にびったりと応じていたと言えるだろう。また、啓蒙の十八世紀を通じて見られた読書人口の増加は、とりわけこうした読者層を増大させたであろう。とくに十八世紀は、女性の読書

がさかんとした時代であるが、『メルキュール・ド・フランス』の予約購読者の約十五%を女性が占めていることは、これを反映するものとして興味深い。男性が、正規に中等教育を受け、職業的・公的な活動に必要な知識や教養を身につけるために読書をするのと異なり、女性は、ほとんど満足な教育も受けないままに、もっぱら自分の個人的な好奇心や楽しみや気晴らしのために読書をするのである。こうした女性の読書は、女性を妻や母としての本来の役割から逸脱させ、あるいは男性の領域を侵して哲学書や科学書を読み男勝りの学識を振り回させたり、あるいは怠惰な時間を小説に読み耽るあまり不倫の誘惑に陥らせたりするものとして、多くの男性から批判を浴びせられた。『メルキュール・ド・フランス』などの雑誌は、そんな彼女らにとって、まさに最適な手引であったに違いなく、女性の知的な教育や活動に否定的な思想家の代表ともいえるルソーが、雑誌を「女たちや愚か者たちに何の知識も伴わない虚栄を与えるにしか役立たない」⁽⁸⁾ものと論じているのは、それをよく物語っている。

実際、『メルキュール・ド・フランス』は、そんな読者大衆と啓蒙の時代の先端的な思想家や学者たちのあいだを取り結ぶ媒介者としての機能を、それなりに果たしていたと評価すべきであろう。先に引用した『メルキュール・ド・フランス』の記事の統計的分析によれば、編集者であるレナールが執筆している書評と読者からの投稿記事とのあいだには、分野によってかなりの違いが見いだされる。たとえば、哲学の分野では、読者からの投稿は、ほとんどが人間観察や処世術といった道徳の分野に区分されるもので、形而上学のカテゴリーに属するものは一点しかない。それについて、編集者は、道徳書の書評や案内にも努めているものの、同時に形而上学関係の書物をも紹介しようとしている。自然科学の分野でも、読者の関心は医学に大きく偏っているが、レナールは物理学やとくに数学（天文学を含む）の分野の書評に力を注いでいる。文芸の分野でも、読者からの投稿は、詩が大多数を占めているが、新刊書紹介の件数では、劇や小説が詩を上回っている。もっとも、レナールは、当時、出版件数の著しく増加していた小説に

はあまり関心がなかったらしく、多くの小説を紹介しているものの、書評はわずかしか書いていない。こうして、レナールは、編集者として、読者の教養の水準や関心のあり方に対応し、彼らを満足させようと努めながらも、同時に、時代の出版文化の流れを彼らに伝え、また、彼らを啓蒙し導こうとする意向を明らかに示している。「ジャーナリストの義務とは、同時代の人々を啓蒙しようと試み、学問と芸術の発展に対立する文芸上の偏見を打破しようと努めることではないだろうか。」⁽¹⁰⁾

一七五〇年、ちょうど『学問芸術論』が刊行された年に、レナールが「メルキュール・ド・フランス」の編集発行人となった。ところが、このレナールは、当時、すでにルソーと知合いであった。ギヨーム・トマ・レナール(Guilhaume-Thomas Raynard) (一七二二—一七九六) は、いわゆる『両インド史』(『両インドにおけるヨーロッパ人の居留と通商の哲学的歴史』一七七〇年初版)で反植民地主義の先駆者として有名な啓蒙主義著述家である。彼はイエズス会に入り、各地のコレージュで教職にあつたが、突然、会を去り、パリのサン・シュルピス教区で臨時司祭を務めたのち、一七四七年、ジャーナリズムの世界に入った。当初は、ザクセン＝ゴータ大公の宮廷に文芸情報を送る「ヌーベル・リテレール」の執筆に携わっていたが、この年、『メルキュール・ド・フランス』の編集発行人に任ぜられたのである。彼はこの頃から歴史書の著述をはじめており、デイドロら百科全書のグループと近しくなっていた。ルソーは、この筋からか、あるいはデュパン夫人を通じて親しくなったパリに滞留中のザクセン＝ゴータ大公公子の筋からか、レナールと知合ったものと思われる。「告白」によれば、レナールとの交際は、かなり親密なものに発展したようであり、また、デイドロやグリムら、この時期の友人たちの多くと敵対的な関係になったのちも、ルソーは、レナールにたいしては、親愛の感情を抱き続けている。⁽¹¹⁾

レナールは、ルソーの『学問芸術論』に特別な関心を寄せ、その入賞からその後の論争の過程にいたるまで、終始、誌上で破格の扱いで報道をしている。まず、一七五〇年七月、受賞の直後、それを知っただけで、レナールは、なにが「メルキュール・ド・フランス」の誌上に手持ちの作品を発表するように求め、ルソーは、デユバン夫人のために書いた旧作の詩『シルヴィアの散歩道』とメタスタシオのロマンスの翻訳「たくさんのおかけで」を楽譜つきで送り、これに応えている。⁽¹³⁾ この二作は、ゲノーが「見せかけだけの謙虚さの傑作」と評するレナール宛の公開書簡とともに、『メルキュール・ド・フランス』の九月号に掲載された。なお、この『シルヴィアの散歩道』は、散歩道を歩みながら、野心や情念に動かされて未来を思い煩うことをやめ、自足した平穏な生活を送ろうと思念しながらも、抑えがたい恋の甘美な情念に心を引き戻されてしまうさまを歌ったものであるが、好評を得たらしく、ルソーの書簡集の編纂者、リーの注解によれば、すぐにハーゲの週刊誌『ラ・ビガリユール』に、「ジュネーヴのルソー氏なる詩人のきわめて美しい詩、「……」。道徳が優雅で心地よく語られている「……」。聞き手を眠らせることは、けっしてないだろう」という紹介を付けて転載されている。

『学問芸術論』は、翌一七五一年一月初めに刊行されるが、レナールは、『メルキュール・ド・フランス』の十二月号で、「ルソー氏は、この作品で、考証と雄弁と哲学を結びつけている。これまで各地のアカデミーで入賞したもつとも優れた論文のひとつと言ってはばからない」と、それを予告している。⁽¹⁴⁾ これには、リーの考察のとおり、『学問芸術論』の印刷を引き受けていたデイドロからの働き掛けがあったのだろう。⁽¹⁵⁾ 翌年の一月号では、レナールは、出版を受けて、十八ページにもおよぶ長い抜粋を掲載している。実際、私の見たかぎり、前後数年にわたり、『メルキュール・ド・フランス』でこれほど長文の紹介がなされた著作は、他に見当たらない。この十八ページという分量は、もとの論文全体の約四分の一にあたり、性格は異なるが、ちょうどこの間、一七五〇年十二月号第二巻に掲載された『百

『科全書』の趣意書に匹敵する長さである。さらに、五月号では、レナールは、彼自身の筆になると見なされている無名の批評『ディジョンで入選した論文についての考察』とそれに対するルソーの反論とを同時に掲載し、みずから大論争の口火を切った。

その後も、レナールは、『學問芸術論』をめぐる論争を、さまざまな著者の批判とルソーの反論とをあわせて、逐一、詳細に紹介し続けている。それでは、なぜ、彼は、知人のひとりとはいえ、このまだ無名の著者が書いた一地方アカデミーの懸賞論文に、これほどまでの熱意を示したのであろうか。ルソーは、一七三五年頃から、『メルキュール・ド・フランス』の予約購読者であったとされるから、レナールは、編集発行人となつて、すでに友人でもあるこの古くからの愛読者に、特別な好意と関心を抱いたのかもしれない。だが、それだけではこの一大キャンペーンの理由としては、不十分だろう。

ブシャールは、ルソーの論文を知った瞬間に、これは読者にアピールすると判断した、レナールのジャーナリストとしての直感に、その理由を求めている。⁽¹⁸⁾先に見たように、『メルキュール・ド・フランス』は、本格的な学者や知識人を相手とした學術雑誌や評論誌ではなかった。その読者の大半は、社会的な地位も教養の水準もやや低い、文芸愛好家の大衆であつた。彼らは、高度な考証的學問や思弁的な理論にはなじめず、あるいは上流階層の豪奢で洗練された生活とも無縁であつた。そして、彼らの手の及ばないそうした知識や生活を羨むとともに、反感も覚えたであろう。こうした点で、『メルキュール・ド・フランス』の読者大衆の少なくともその一部においては、彼らの意識は、ディジョンのアカデミー会員たちのそれと、まさに重なり合う。このいささか素朴な読者たちは、それを入賞としたアカデミー会員たちとともに、ルソーの論文の目覚ましい雄弁に魅了され、また、それが説く無為な學芸の弊害や上流社会に広がる奢侈や退廃の告発に共鳴し、美德の復権の訴えや古き良き時代の賛美に心を打たれたに違いない。

わたしは、もつとも直接的な理由としては、デイドロを中心とし、レナール自身も含んだルソーの友人たちの工作があつたのではないかと思う。『学問芸術論』の出版時期についてのリーの考証が正しいとすれば、⁽¹⁹⁾「メルキュール・ド・フランス」の十二月号の記事は、その刊行を予告したことになる。ところが、その記事の文言からすると、レナールは、ルソーの論文をすでに読んでいたかのような印象を受ける。彼は、原稿か校正刷を読む機会があつたのか、あるいは誰かに内容を指示されてこの記事を書いたのか、そんな機会を与えたり、指示をしたり、あるいは出版準備の進捗についての情報を与えたりすることができたのは、これもリーの推測どおり、この論文の構想以来、深く関わり、その出版の手間を引き受けていたデイドロのほかにないだろう。

受賞から出版までの中間の時期に発行された『メルキュール・ド・フランス』十月号に、トゥサン (Toussaint 一七一五—一七七二) の「印刷術の利点と欠点についての手紙」と題する論文が掲載された。⁽²⁰⁾ この論文には、『学問芸術論』の所論に通じる箇所がいくつか見いだされる。たとえば、学問があることが人にとって有益であろうか、学問は人間の境遇を改善するだろうかと問い、「人間があらゆる配慮をして学問から得ることができるものは、あまりにもわずかで、あまりにも無用なものであるから、それに生涯、楽しみ、安らぎを犠牲にするには及ばない」と答え、また、印刷術の大欠陥は、「幾千もの下らない著作を保存することにあると論じている。このトゥサンは、弁護士で『習俗論』(二七四八)で有名な自由思想家であるが、この頃、デイドロやルソーと親しかつたと言う。ルソーの論文の趣旨を予告するようなこの論文がこの時期に掲載されたのは、単なる偶然だろうか。むしろ、そこにルソーの友人たちの作為を見ることもできるのではないだろうか。

ルソーは、この時期、尿閉症が再発し、かなり長く病床にたかなければならないほどであつた。それもあって、彼は、すでに百科全書の編纂を委ねられ、出版界の事情に通じていたデイドロに、出版の世話を任せた。⁽²¹⁾ 任せられたディ

ドロは、持ちこたえの行動力と社交性を發揮して、単に出版者との交渉のみならず、この彼自身も深く関わってきた論文の成功のために、さまざまに策をめぐらし奔走したことだろう。「メルキユール・ド・フランス」の行なった大キャンペーンは、幸い偶然にも編集集行人となつたレナールが、その地位を利用して、それに応えたものであつたのだろう。ルソーは、後に「告白」⁽²²⁾で、この出世作の成功を「なんら策をめぐらしたわけではなく、しかも無名の著者に与えられた世間のこれほどの好意」と書いている。ルソー自身が策をめぐらしたわけではないのは、確かにそのとおりかもしれない。しかし、策をめぐらしたのが、「告白」を書いた時点では、もうその大部分が決定的な敵同士になつて久しい友人たちであつたとしたら、どうだろうか。周知のように、ルソーは、彼が著述家としてデビューして後の半生を「不幸の連鎖」と言い、それが彼の意に反して始まつたものだとして繰り返して述べている。とりわけ、「告白」第七卷では、「もし不幸にも、そしてまさに彼「デイドロ」のあやまちによつて、彼と同じ職業に投げ込まれたりしなかつたなら」と、その責任をデイドロに帰している。彼のこうした回想には、怨恨や被害妄想や自己弁護では片付けられない、少なくとも彼自身にとつての（事實的な）根拠があつたのだろう。

ところで、こうしてルソーの論文が世に認められるように、大いに努力したレナールであつたが、彼は、必ずしもルソーの論旨を全面的に支持したわけではなかつた。「メルキユール・ド・フランス」の一七五一年一月号に掲載された「學問芸術論」の長文の要約では、レナールは、彼自身の見解や評価をほとんどまじえず、豊富な引用を要約つなぎ、ルソーの論じているところを、ほぼ余すところなく忠実に伝えようとしている。⁽²⁴⁾しかし、それでもなお、詳細に見れば、多少の言い落としや単純化もないわけではない。たとえば、学問や芸術を、人間の生まれながらの「根源的な自由」を抑圧し、人間を社会の「奴隷状態」につなぎ留めている。「鉄鎖のうえにひろげられた花飾り」と述べた、あの有名な一節、つまり、後のルソーの思想の中心をなすことになるアイデアに、格別の関心を払うこともなく、

行き過ごしている。あるいは、学問は迷信や野心や吝嗇といった悪徳に起源し、道徳さえも傲慢から発生したという一節は、あまりに不条理に思われたためであろうか、さりげなく避けて通っている。そして、レナールが全体として強調しているのは、文明の洗練に隠された悪徳の栄え、奢侈の生み出している退廃、学問の乱用がもたらしている道徳的、宗教的な秩序の不安といった、いわば比較的常識的な範囲にとどまった論点であり、また、ルソーの論述の筆法の大膽さ、奇抜さ、巧妙さである。

同年の六月号に、ルソーの反論とともに掲載された無署名記事「(25)ディジョンで入選した論文についての所見」は、ブレイアード版『学問芸術論』の編集者プシヤルディールら、多くの研究者によって、ほぼレナール自身の筆になるものと推定されている。この無名の筆者は、ルソーの才能を高く評価し、その論文に「善と真とがみなぎっている」ことを認めながらも、現実的な良識の立場から、ルソーの論じる一般論にいくつかの疑問を率直に呈し、より敷衍した説明や適切な修正を加えた論文に書き改めるようにと促している。筆者は、奢侈があまりに激しく非難されていることに当惑や不愉快を覚えるであろう人々の立場に立つて、学問の復興以前の「偽りの知識やスコラの隠語」が支配していた中世の状態のほうが好ましいのかと問い、あるいは、洗練よりも野卑が好ましいのか、あらゆる学者、芸術家を一刀両断にするのか、退廃の時代はいつから始まるとするのかなどと問うているが、こうした論点のなかには、たしかに厳密に言えば、ルソー自身も反論するように、彼の議論を無視していたり、彼の論旨からずれた批判も含まれている。これらは、いずれも後に紹介する論争で当時のルソーの批判者たちが取り上げることになる、いうなれば常識的な批判であるが、そこには、知性のオプティミズムと道徳的コンフォームィズムのない混ざった啓蒙の時代の一般的な良識をうかがうことができるだろう。あるいは、また、評者は、ルソーの観念的な文明批判にたいして、奢侈をフランスのような文明大国では許容せざるをえないものとする現実主義を対置している。そして、批判を「著

者の論じる主張から、どのような実際的な結論を引き出せるのだろうか」という問いによって終わっている。結局のところ、もつとも重要なのは、ルソーの主張するところから、一般読者が「単なる私人としてどのような立場をとることができるかを知ること」であり、言いかえれば、「各個人をして公共の善の要求するところに進んで協力させることに成功する」方法を明らかにすることなのである。評者は、こうして、素朴にも、ルソーを実践的な社会道徳論の根本問題に取り組ませようとする。

もしこの匿名の筆者がレナール自身であるとすればもちろんのこと、仮にそうでないとしても、この批評を掲載したのには、半年前に大いに宣伝したルソーの論文の主張に、今あらためて留保を示しておこうとする編集者レナールの意図があったのであろう。それは、言うまでもなく、すべての読者をそれなりに満足させようとする編集者の平衡感覚によっている。『メルキユール・ド・フランス』のような雑誌は、そのありかたからして、中庸を重んじざるをえないのである。しかし、それはそうとしても、ルソーの論文へのこうした批判を、もっぱらそうした配慮からのみなされたものと見なすのも、当を得ていないように思う。レナールやデイドロを含むルソーの仲間たちにとつて、ルソーの議論は、常識を打ち破り、文明の繁栄に隠された悪をあばきだすひとつの議論ではあっても、その根本的に反動的な反文明論は、留保なしには支持できないものであったり、ほかの議論も可能なひとつの議論に過ぎなかったのである。

この批評にたいし、ルソーは、同じ号に掲載された回答で、逐一反論を行なっているのだが、その詳細は措くとして、注目されるのは、彼は、この時からすでに、「美德と真理」を拠り所として、反文明的な原理を非妥協的に守ろうとする原則主義を自分の立場としようとしていることである。「自分を弁護する必要が生じたときには、私は自分の原理のすべての帰結に何のためらいもなく従うであります。……」私は、あらかじめ、どんな重大なことば

で攻撃されるかを承知しております。「知の」光明、知識、法、道徳、理性、節度、尊敬、温和、礼儀、教育、など。それらすべてにたいして、私は、私の耳にさらにつよく響く、もうふたつの言葉によってのみ、答えるでありましょう。美徳、真理と、私は、自分自身に絶えず書き続けるでありましょう。真理、美徳、もしそこに単なる言葉だけしか認めない者があるとすれば、私はもはや彼に言うべきことがありません。この挑戦的な決意の表明が、『告白』で回想されている、余生を「独立と貧困」のうちに送ろうと、「自己革命」を決意した、あのヒロイズムの高揚に照応していることは言うまでもない。

注

- (1) 当時の『メルキュール・ド・フランス』の概観については、Jacques Godehot (ed.), *Histoire générale de la presse française*, P.U.F.の第三章の記述を主に参考にした。原本としては、明治大学図書館所蔵の復刻版を閲覧、利用させていただいた。以下、同誌の記事の分析や引用については、Wagnerの著書に依らないかぎり、直接、この復刻版を参照したものである。
- (2) Jacques Wagner, *Marmontel journaliste et le Mercure de France (1725-1761)*, Presses Universitaires de Grenoble, 1975, p. 91 sq.
- (3) *Histoire générale de la presse française*, p. 159.
- (4) J. Wagner 前掲書 p. 15-16.
- たとえばモンテスキューの『ペルシヤ人の手紙』一〇八「ペルシアでは全然知られていないが、当地ではえらくはやっているように見える一種の本がある。それは新聞だ。怠け者どもがそれを読んでいい気になっている。十五分で三十冊分を通読できるのがこたえられないのだ。[……]新聞編集者たちの犯している大きな過ちは、新刊書についてしか語らぬことだ。まるで真理はかならず新刊であるかのようなようだ。[……]しかし、彼らが書きたてのほやはやの作品についてしか語らぬということとを掟とする場合、彼らはしごく退屈であるという別の掟を自分に課しているのだ。彼らは自分たちが抜粋をこしらえる書物について、批判すべきいかなる理由があるうとも、批判しようとはしない。それにしても、十人も十二人も敵を毎

- 月つくらうとするほど無鉄砲な人間がどこにいるだろう」(井田進也訳・中央公論社『世界の名著』「モンテスキュー」所収)
- (5) J. Wagner 前掲書 p. 15
 - (6) Histoire générale de la presse française, p. 213.
 - (7) 同前。
 - (8) J. Wagner 前掲書 p. 16. シヤロン・ヴェルネ宛一七五五年四月二日付書簡 Correspondance complète de Jean Jacques Rousseau, 286. 以下、この書簡集はCCと略記し、書簡の番号を付すこととする。
 - (9) J. Wagner 前掲書 p. 91 sq.
 - (10) 同前 p. 188.
 - (11) レナルにひいては、Anatole Feugèreの代表的な伝記研究を今回は参照すべき、むしろあたりブレイアード版全集所収の『告白』の注解をCC 153のリーの注解、また Jean de Vigurie, Histoire et dictionnaire du temps des lumières, 1995 その他の事典の項目を参照した。
 - (12) 『告白』第八巻。
 - (13) CC 153 『シルヴィアの散歩道』にひいては、Jean-Jacques Rousseau, Œuvres complètes, (Bibliothèque de la Pléiade), vol. 3, p. 1146-1149. (以下、Plと略す)
 - (14) Mercure de France, décembre 1750 1er vol., p. 130.
 - (15) CC 154
 - (16) Mercure de France, janvier 1751, p. 98-116.
 - (17) P. M. Masson, La Religion de J. J. Rousseau, t. 1, p. 102.
 - (18) M. Bouchard, L'Académie de Dijon et le premier discours de Rousseau, 1950, p. 103
 - (19) 前掲 CC 154
 - (20) Mercure de France, octobre 1750, p. 71-87. マサチンのこの論文にひいては、CC 158のリーの注解のほか、エラールによつて取り上げられたJean Ehrard, L'idée de la nature en France dans la première moitié du XVIII^e siècle, p. 464。
 - (21) 『告白』第八巻° Pl. v. 1, p. 361, 363.

- (22) 同前
- (23) Pl. v. 1, p. 288.
- (24) 前田 Mercure de France, janvier 1751, p. 98-116.
- (25) Mercure de France, juin 1751 2^e vol., p. 94-97. CC 158.
- (26) Mercure de France, juin 1751 2^e vol., p. 98-102. CC 159.